

特集

〈事例〉

県下センターが一堂に集結し 作品の展示・即売や演技を披露

公益社団法人
山口県シルバー人材センター連合会
(山口県)

山口県SC連合会は、普及啓発促進月間に当たる令和4年10月に、「設立25周年記念 シルバーフェスティバル」を開催。辛坊治郎氏の特別講演をはじめ、会員は手作り作品を展示・販売、趣味や特技、同好会・サークル活動の成果をステージ上で披露した。県下センターと一般から合計555人が来場して、シルバー人材センターの周知につながるイベントとなった。

県下のセンターが一堂に 会する大規模イベント開催

山口県SC連合会（以下、連合会）では、令和四年十月二十一日に「設立二十五周年記念 シルバーフェスティバル」を、JR新山口駅に直結するKDDI維新ホールで開催した。県下のセンターが一堂に会するイベントは、実に十一年ぶり。本来は、公益社団法人になって十周年を迎えた令和三年度に行う予定だったが、コロナ禍のため、設立二十五周年に当たる令和四年度に持ち越した。

浜田美智子常務理事兼事務局長は、開催の目的を「センターや会員を元気づけたいと考え、開催を

決めました。また、地域社会の期待に十分応えられるようこの機会にPRして、会員を拡大したいという思いもありました」と話す。

開催に向けては、平成三十年分から計画的に特定費用準備資金として積み立てを行い予算を確保。具体的な準備は令和四年三月から行い、特別講演の登壇者として元読売テレビアナウンサーの辛坊治郎氏の起用を決定した。

五月から、以下の準備を進めた。

●サポート依頼

大規模イベントのため、株式会社読売広告西部山口支社（以下、読売広告）に協力を依頼した。

●各センターに参加を呼び掛け

県下十四のセンターにステージ



「時代を読み解く」と正しい判断は正しい情報から」と題して特別講演を行った、元読売テレビアナウンサーの辛坊治郎氏

開会のあいさつをする山口県SC連合会の大田良充会長



発表、作品展示、物品販売への参加を呼び掛けた。ステージ発表については、参加を希望した五センターを担当職員が訪ねて、あらかじめ内容を確認した。

●バスの手配
参加を希望した十三センターのうち、十二センターに大・中型バス十三台を手配。開催日が秋の行楽シーズンと重なり必要台数がそろわなかったため、読売広告に手配を依頼した。

●弁当注文
昼の時間帯を挟むため、弁当を用意した。当初は各センターで発注してもらおう予定だったが、取り

まとめを要望する声が多かったため、連合会が一括して注文。代金は、各センターで負担した。

●参加希望者を募集

三回にわたり読売新聞で、参加希望者募集広告を掲載。予定を上回る応募があったため、抽選で二百三十五人に招待状を送付した。

その他の準備は、読売広告のアドバイスを仰ぎながら進めていった。例えば、チラシの作成や展示のレイアウト、ステージ発表の台本などのほか、感染防止対策としてイベント当日には参加者バスを着けたり、除菌用ウェットティッシュを配布したりするのも、同社からのアイデアだったという。

浜田事務局長は「社はイベントの企画・運営に慣れていますが、何が必要か細かくアドバイスをしてくれたので助かりました」と話す。

こうした中、七月から始まった新型コロナウイルス感染症の第七波は、十一年ぶりのイベントを盛り上げようという機運に水を差し

た。準備を進める連合会に、「なぜこのような時期に高齢者を集めるのか」「リスクを冒してまでやることではない」という意見が寄せられた。「それでも、理事から後押しをしてもらおうことができ、開催に至りました」と、浜田事務局長は振り返る。

第七波の到来がマスコミで騒がれながらも自粛要請ではなく、ウイズコロナの流れになったことも追い風になった。また、山口県から感染防止対策を徹底して開催するよう指導があり、マニュアルに従い十分な準備を行って、センターへの説明をZoomで行うなどして、当日を迎えた。

著名人が特別講演
会員も練習の成果を披露

フェスティバル当日は、連合会職員八人に加え、読売広告とその協力会社の十一人がイベントスタッフの役割を担った。受付は、一般の参加者に関しては読売広告が、

会場の一角では、各センターが木工品やリメイクした洋服などの手作り作品を展示・販売した。写真の右側は、手芸品を並べた周南市SCのブース



センター関係者の対応は連合会が手分けして行った。

ホール前のホワイエでは、十一センターが作品展示と物品販売の

ブースを出展した。リメイクした洋服や手芸品を展示・販売する山口市SCのブースでは、買い物を楽しむ女性の姿が多く見られた。柳井広域SCは絵画や写真を展示



宇部市SCの民謡同好会と、井上博己さん（写真左下）による発表

し、会員が手作りした柳井市を代表する民芸品・金魚ちょうちんを販売。そのほかのセンターも、手芸品や木工品などを展示・販売し、ハワイエは大勢の来場者でにぎわいを見せた。

メインホールでは十時三十分から、地元のラジオやテレビで活躍するご当地タレントの大谷泰彦氏（通称ヤスベエ）の司会進行でプログラムが始まった。まず、連合会の大田良充会長が開会のあいさつをし、続いて来賓があいさつ。十時五十分からは、防府市SCが独自事業の作品を紹介しながら、会員が入会して良かったことなどを話した。

十一時十五分からは、会員によるステージ発表に移った。トップバッターを務めた宇部市SCの民謡同好会十二人は、笛や三味線に合わせた民謡をはじめ、「宇部のシルバールの元気のもと 介護に草刈り皿洗い」と歌詞をつけた「宇部元気音頭」を発表した。また、

「西条酒造り唄」を披露した井上博己さんは、「会場が広いので尻込みしましたが、めったにない経験なのでチャレンジしようと思いました。発表後はずがすがしい気分です、やって良かったと思いました」と、笑顔で話してくれた。

昼休憩を挟んで十三時からは、辛坊治郎氏による特別講演「時代を読み解く」がスタート。ロシアの情報からウクライナ侵攻の動向や、自身が平成二十五年にヨットで太平洋横断中に遭難し、間一髪で命拾いした体験などを語った。

続いて会員によるステージ発表では、長門市SCの石川信男さんがテンガロンハットをかぶって登場。ジョークを交えながら、ハンカチマジックなどで来場者を楽しませた。

周南市SCの米本豊弘さんは、漫談家・綾小路きみまろの物まねに挑戦した。長髪のかつらに赤いジャケットを着用した米本さんの

長門市SCの発表は、石川信男さん写真左によるマジック。大田会長もゲストとしてステージに上がった



姿は、遠目から見ると本人かと思間違えるほどの完成度。「ファンデーション」落ち着く先はシワの中など、二十分近くしゃべりっぱなしの独演も見事で、その暗記力の高さには司会者も驚きを隠せない様子だった。

プログラムの締めくくりは、岩国市SCのバンド「SAB65」によるパフォーマンス。段ボールや

カップ麺のカップなどで作ったギターやアコーディオンを弾くふりしながら、「ラブユー東京」「二人の銀座」など、懐かしのナンバーをカラオケに合わせて歌い上げた。この出し物は、楽器の弾きまねパフォーマンスが人気のヴィジュアル系エアバンドのゴールデンボンバーから着想を得たという感覚が若々しい。

発表について浜田事務局長は、「独自事業の紹介や女性部会の取り組みが多いだろうと予想していたので、意外でした。各センターもフェスティバルだから楽しいス



綾小路きみまろの物まねを披露した、周南市SCの米本豊弘さん。約二十分しゃべりっぱなしの独演を行い、会場を盛り上げた

テージがいいだろうと、いろいろと趣向を凝らしてくれたようです。会場の皆さんにも、楽しんでいただけたのではないのでしょうか」と話す。

発表終了後は大田会長が閉会のあいさつをし、フェスティバルは十五時四十分閉幕。イベントの



岩国市SCは、バンド「SAB65」のメンバーによる、懐メロのエア演奏（楽曲に合わせて演奏するふり）。楽器は段ボールなどで手作りしている

間は、連合会職員がドアの取っ手など、手が触れる箇所を随時消毒するなどして感染防止に努めた。

楽しめる機会を増やし 会員拡大につなげたい

会場のKDDI維新ホールは、令和三年にオープンしたばかりとあって設備が整っており、自分たちで機材を持ち込むことはほとんどなかったという。

会場の感染防止対策も徹底した。昼食会場として施設内の会議室を押しさえ、職員や会員は前・後半の二グループに分かれて交代で昼食をとった。後半のグループからは「早い時間帯に食べたかった」との声も聞かれたが、おおむねスムーズに進行した。

また、約二百席のメインホールが満席にならないよう、フェスティバルへの参加者は六百人を定員とした。そのうち、センターの職員や会員の参加は三百七十四人。シルバー人材センターの普及啓発

を兼ねて招待した一般参加者は二百三十五人だったが、実際には五十四人少ない百八十一人の来場にとどまった。

フェスティバルを終え、浜田事務局長は「連合会だけでは、これほど大規模なイベントはできなかったと思います。皆さんに喜ばれるフェスティバルになったのは、県トセンターの協力のおかげです」と振り返る。また、浜田事務局長は全シ協主催の「シルボンヌ全国大会」で実行委員を務めており、その経験も役に立ったと話す。

このイベントをきっかけに、少しでも会員が増えればと、浜田事務局長は期待を寄せる。「連合会もセンターも、会員がいてこそ成り立つもの。今回のフェスティバルのように、会員に楽しんでもらえる機会を増やすために、実績を伸ばして予算を確保し、こうした機会を今後もつくっていききたいと思っています」と展望を語った。

(井本旬子)